

第4章 固定資本と流動資本にかんする諸理論

【P292,9行目～P294,5行目】

資本価値の補填の仕方の違いについてケネーは、再生産過程とその過程自身から導き出しており、A・スミスよりまともである。

A・スミスは「利潤が固定資本によって得られるには固定資本が生産過程に留まるからであり、流動資本によって得られるのは生産過程を去って流通させられるからである」と間違った説明で、本来、固定資本と可変資本という本質的区分による剰余価値形成を、固定資本と流動資本とに固執したため資本主義的生産の秘密（搾取）が隠され、その後の経済学はさらにこれを進めた。

【P294,6行目～P300,後2行目】

A・スミスは「いかなる固定資本も流動資本によることなしには、収入をもたらさえない。いかに有能な機械や仕事用具でも、それが使用されるための材料とそれを使用する労働者の生活手段とを供給する流動資本がなければ何も生産しないであろう」と両資本部分が生産物形成者であると言って、例として農業者の家畜や種子の例で、固定資本、流動資本の観念が説明されている。

また、A・スミスは、固定資本となる諸物を素材的要素で数え上げ、流動資本の諸物を数え上げているが、同じものでも、労働過程での機能によって流動資本にも固定資本にもなりうる（ので間違い）。さらにA・スミスは、固定資本、流動資本となる諸物の区別を、生産資本と流過程にある資本に属する諸形態である商品資本および貨幣資本の区別と混同している。それは「流動資本は、・・・それぞれの商人の手にある各種の生活手段、材料、および完成品と、それを流通させ分配させる等のために必要な貨幣とからなっている」といっているから。

【P300,後1行目～P307,2行目】

A・スミスは、流動資本の特徴は、それが流通または持ち主転換によってのみ収入をもたらす。流動資本は4つに分類され、1.貨幣、2.食料、3.生産材料、4.完成製品で、1は貨幣資本、2,4は商品資本、3は商品資本であり生産資本であると混同している。

最後に注意をひくのは、A・スミスが流動資本の構成部分を枚挙するとき、労働力を入れていないことである。しかもこれは二重の理由からである。一つは、労働力は市場で流通している間は資本でない。労働者は、自分の肉体（労働力）という商品を市場に持っていき、それが生産過程に合体されたときに資本の構成部分となる。スミスは流通部面では資本でない労働力を、彼のいう流動資本に入れることが出来なかった。もう一つは、彼は「習得された有能な諸能力を固定資本の部類に入れていたため流動資本に入れることが出来なかった。

【P307,3行目～P312,4行目】

A・スミスは「流動資本の4つの分類のうち3つ（食料、生産材料、完成製品）は、流動資本から引上げられ固定資本か直接的消費に繰り入れられるから、全ての固定資本は流動資本から出ているものであり、たえず流動資本によって維持される。すべての有能な機械や仕事用具は、それらを作るための材料とそれらを作る労働者の生活手段とを供給する流動資本から出ている。それらはまた、たえず手入れをしておくためにも、同種の資本を必要とする」と言っている。

マルクスは、資本主義的生産様式において、ほとんどすべての生産物は商品として市場に投げ込まれ、生産的消費及び個人的消費の全ての要素は商品として購入されなければならないが、だからといって「どの固定資本も流動資本から出ていることにはならない」それはスミスが流通資本（商品資本、貨幣資本）と流動資本とを混同しているからであると批判している。

しかも、スミスは自分の言ったことを破棄している。それは、「土地、鉱山、漁場は、それを開拓するために、固定資本と流動資本との両方を必要とする」と言っており、固定資本も流動資本に維持されていると言っていたのを破棄している。

さらに、スミスの「そしてこれらの生産物は、これらの資本のみでなく、社会にあるすべての他の資本をも、利潤を伴って補償する」という部分を批判し、それらの生産物は、すべての他の産業部門のために原料、補助材料等を供給する。しかし、それらの生産物の価値はすべての他の社会的資本の価値を補填しない。この価値は、それら自身の資本価値を補填するだけである。この点ではA・スミスに再び重農学派への回想が流れている。（ケネーの重農主義（農業生産物が他の分野にどう分配されるかを明らかにし、農業こそ本源的生産分野だと説いた）を。A・スミスは、土地、鉱山、漁場こそ本源的な生産分野だと位置づけた。）

生産物の現物形態の区分を、例を挙げて説明。（P309,後2行目～P312,4行目）

【P312,5行目～P316】

A・スミスの文章で注意すべきは「それら（機械等）を作る労働者の生活手段を供給する流動資本」という文句である。

重農学派にあっては、労働賃金として前貸しされた資本部分は、正当に原前貸しに対する年前貸しに属するものとされて正しく位置付けられている。他面では、農業労働が独特の学説で、他種の労働と区別されている。

A・スミスが、労働者の生活手段を固定資本に対する流動資本と規定し、流動資本と流通資本を混同していることに気が付いていない。

A・スミスによって、流動資本なる規定が労働力に支出された資本価値の決定的なるものとして固定されたことで、彼の後継者たちが労働力に支出された資本部分を可変資本として認識できないようにする事に成功した。その後の著述家たちにより、さらに労働者のための生活手段に支出されるということを流動資本の本質的規定に追加した。これに関連し、生活必需品から成る労働原本は一定量である、それは一面では、社会的生産物における労働者の分け前の限界を限定し、他面では、労働力の購入に際して、この分け前の全量に応じて支出されざるを得ないものであるという学説が出たのである。